

訪探市吹笛

第56回

笛吹市の史跡⑮ 小山城

今回ご紹介する小山城は、八代町高家の浅川扇状地北端に位置する天川(てかわ)に面する階段状の地形(河岸段丘)の上にあります。ここからは、甲府盆地を広く眺望できます。また、北に鎌倉街道、西には若彦路(わかひこじ)が通っており、交通の便が良い場所です。

小山城には、高さ約3〜5メートルの土塁(どるい)が巡り、その周りを幅8〜15メートルの堀が囲む一辺約100メートル四方の四角形の城跡です。この大きさは戦国時代の土塁の屋敷とほぼ同じです。

土塁の内側は、現在は平らですが、かつて段差があったと言われ、土塁の基底の一部には石積みが見られます。

また、東辺の中央部分には、城の出入り口である幅約3・6メートルの虎口(こぐち)があり、南側にも大手(正面入り口)と考えられる虎口があります。なお、土塁の東隅を除く三隅は、上が平らで外側に向かってやや突き出しているので、櫓台(やぐらだい)と考えられています。

それでは、小山城の歴史を振り返ってみましょう。

小山城に関する一番古い伝承としては、室町時代に穴山伊豆守の居城であったという話が伝えられています。この穴山伊豆守は、宝徳2年(1450)に当時甲斐国の守護であった武田信重のぶしげを、小石和の館現在の成就院境内で自害に追い込んだ人です。また、戦国時代の初めには、穴山信永の

ぶながが小山城を居城にしていたと言われている。

この信永が居住していたと言われている大永3年(1523)には、南部氏との間で合戦が起こりました。南部氏が鳥坂峠を越えて攻め寄ったため、信永は花鳥山へ陣を張って待ち構えました。しかし、信永はこの合戦に敗れ、小山城へ逃げ込みましたが、城を敵に囲まれたため脱出し、二宮の常楽寺で自害を遂げました。常楽寺には、信永の位牌があると伝えられています。

その後、再び小山城が歴史の表舞台に登場するのは、戦国時代末期である天正10年(1582)のことです。

この年の3月に、戦国大名の雄である武田氏が織田信長によって滅亡へと追い込まれ、甲斐国は河尻秀隆(ひでたか)が支配することになりました。

しかし、6月には、信長が本能寺で明智光秀に攻められ自害し、河尻秀隆も生き残った武田家家臣の一揆により殺害されたため、甲斐国は主のいない土地となりました。そのため、甲斐国は周辺大名の奪い合いとなり、特に遠江国(現在の静岡県)の徳川家康と相模国(現在の神奈川県)の北条氏政・氏直(うじまさ・うじなお)父子が名乗りを上げ、争いが起きました。

こうした中、北条氏直は、上野国(現在の群馬県)から碓氷峠を越え、信濃国(現在の長野県)の諏訪郡から甲斐国に狙いをつけ、一方、氏直の叔父にあたる氏忠(うじただ)

が鎌倉街道を通り都留郡へ侵攻し、甲府盆地をつかぎました。

それに対し、7月3日に浜松を出発した徳川家康は、甲府に入り、氏直の軍に対抗するため新府城(現在の韮崎市にあった)に陣を張りました。

氏忠は家康の背後をつこうと手薄になった甲府盆地へ兵を進めましたが、家康の家臣鳥居元忠(もとただ)が迎え撃ち、8月12日に黒駒で合戦となり北条氏の軍を撃退しました。

この合戦の際、鳥居元忠と三宅康貞(やすさだ)が小山城に配置されたと言われており、現在見られる高い土塁と幅の広い堀は、この時に修築されたものと考えられています。結局、徳川軍が都留郡を制圧し、甲斐国は徳川家康のものとなりました。この甲斐国や信濃国をめぐる戦いが「天正壬午(てんしゅうじんご)の乱」です。

皆さんも戦国時代に思いをはせながら小山城を散策してみてはいかがでしょうか。



小山城跡